

2021年11月7日（日）

宣教 『逃げるヨナ』

テキスト：ヨナ書1章1～15節

今日から4回に亘ってヨナ書を学び、神さまの声を聞き、恵みに与りたいと願っています。預言者ヨナの名のついたヨナ書は4章と短いですが、1章は少し長いのですが、司会者の方に毎回1章読んで頂くことを感謝します。共に心を合わせて聞きたいと思います。

さて、ヨナ書は物語としてとても面白い内容です。ヨナの行動がわたしたちの心を引きつけます。また、神さまの大きな救いの計画がすることも心に残ります。大まかな内容を先にお伝えした方が理解しやすいと思いますのでお伝えさせていただきます。

聖書を分かりやすく訳してくれていますリビングバイブル聖書の説明を用います。「ヨナはイスラエルの預言者で、まもなく、紀元前722年イスラエルを滅ぼそうとしていた敵国アッシリアの首都ニネベに、悔い改めの説教をするように、神さまから示されました。しかし、ヨナの愛国心が異教徒に救いをもたらすことを許さず、彼は舟で神さまから逃げようとします。その途中、海に投げ込まれ、大魚にのみ込まれますが、やがて海岸に吐き出され、ついには神さまの命令に従い、ニネベに宣教に出かけたのです。しかし、人々が悔い改めたのを見て憤ったヨナに、神さまは一本の木を通して、実物教育をすることになります。」これがヨナ書全体の大まかなストーリーです。ヨナは自分の信じている神さまが、他国の人々を救うことを望まないと言う偏狭な狭い心の預言者、信仰者であったということです。

では、1章に入りましょう。

1章には、ヨナの神さまからの派遣命令が1節、2節にあります。

ヨナの神さまからの逃亡と舟が難破する場面が3節から16節に記されています。

◆ヨナの逃亡

1:主の言葉がアミタイの子ヨナに臨んだ。

ヨナは旧約聖書の預言者の一人です。預言者は神のことばを聞いて人々に伝える使命があります。またヨナという言葉には、「鳩」という意味があります。神さまからヨナに派遣命令が語られます。

2:「さあ、大いなる都ニネベに行ってこれに呼びかけよ。彼らの悪はわたしの前に届いている。」

当時の帝国であったアッシリアの首都ニネベに行って、神のことばを語るよ

うにとの命令です。神から見ればニネベの人々の言葉や行いは悪に満ちて神さまにまで届いていたのです。史実としては紀元前 612 年ごろアッシリアは滅んだようです。

3:しかしヨナは主から逃れようとして出発し、タルシシュに向かった。

ヤッファに下ると、折よくタルシシュ行きの船が見つかったので、船賃を払って乗り込み、人々に紛れ込んで主から逃れようと、タルシシュに向かった。しかし、ヨナは神の命令に従わず逃げたのです。ヨナは神から逃げた預言者でした。ヨナは天と地を創られた神を信じていました。しかし敵でもある外国の地ニネベには行きたくなかったのです。ヨナの気持ちは分かる気がします。なぜあんな所に行かないといけないのか、ヨナの心は神の救いは自国イスラエルだけで良い、自国中心主義です。ですからヨナは逃げたのです。ヨナは怖かったのでしょうか。ヨナを自分に置きかえれば、他人ごとではなくなります。行きたくない所、したくないこと、偏狭な考え、価値観など色々あります。どうしてあんな所に行かなければならないのか、と思うこともあるでしょう。ヨナは神からの命令に背いて逃げるのです。「タルシシュに向かった。」「タルシシュ」はイスラエルから見れば地中海を超えた今日のスペイン東部にあたる地方だとも言われます。しかし、逃げるヨナを神はほってはおかれませんでした。ヨナは神に選ばれた神の言葉を伝える預言者でした。

ここから大変な事態が起こります。

4:主は大風を海に向かって放たれたので、海は大荒れとなり、船は今

にも砕けんばかりとなった。

主とは、ヤハウェであり、天と地を創られた神さまのことです。海は大荒れとなり、船は難破状態になり、今にも砕けんばかりです。万事休すです。ついに待つのはヨナと乗組員・乗客の死のみです。乗客のことは書いてないので乗組員だけであったかもしれません。するとヨナは、ひそかにこの船に忍び込んだのでしょうか。

ともかく、一大事の中、5:船乗りたちは恐怖に陥り、それぞれ自分の神に助けを求めて叫びをあげ、積み荷を海に投げ捨て、船を少しでも軽くしようとした。しかし、ヨナは船底に降りて横になり、ぐっすりと寝込んでいた。乗組員たちは恐怖に怯えます、そして、それぞれが自分たちの信じていた神に助けを求めて叫びました。また助かるために荷物を捨てて少しでも船を軽くしようとします。この時、「ヨナは船底に降りて横になり、ぐっすりと寝込んでいた。」「いびきをかいていた」と訳している聖書もあります。「何と」と思います。絵本にあるような感じですが、ヨナは信じる神から逃げて、船底の暗闇の中に横たわっていたのです。この時のヨナの心を表しているかのようにも思えます。

そのヨナの所に船長が来たのです。6:船長はヨナのところに来て言った。「寝ているとは何事か。さあ、起きてあなたの神を呼べ。神が気づいて助けてくれるかもしれない。」船長はこんな事態の中、寝ているヨナにあきれ、ヨナの信じている神に叫べと言います。古代人は国は違っても現代人より信仰的です。現代人は、お金や技術や科学を信じている人の方が多いようです。

船長のことばは、はヨナが神に仕える預言者であることを思い出させたのです。わたしたちも、時に一番近い人たちから「お祈りしないの？」とか素朴に問われたり、自ら人生の暗い深みに落ちて、自分がイエスを信じるキリスト者であることを気づかされることがあるのではないのでしょうか。

ヨナも起きて、乗組員の所へ行きます。7:さて、人々は互いに言った。「さあ、くじを引こう。誰のせいで、我々にこの災難がふりかかったのか、はっきりさせよう。」そこで、くじを引くとヨナに当たった。

古代では、大事なことを決める時、人をはっきりさせる時によくくじを引いたようです。モーセに導かれた人々が神に与えられたカナン土地を12部族に分ける時にくじを引きました。ヨシュア記18章10節(P367)「ヨシュアは、主の前で彼らのためにくじを引き、イスラエルの人々に決められた割り当てに従って土地を分配した。」また、イエスの12弟子のユダがイエスを裏切り自殺し、後に弟子を選ぶ時にくじを引いたことを思い出します。使徒言行録2章26節(P214)「二人のことでくじを引くと、マティアに当たったので、この人が十一人の使徒の仲間に加えられることになった。」

船員たちのくじは、ヨナに当たったのです。

そこで、人々はヨナに問います。

8:人々は彼に詰め寄って、「さあ、話してくれ。この災難が我々にふりかかったのは、誰のせいか。あなたは何の仕事で行くのか。どこから来たのか。国はどこで、どの民族の出身なのか」と言った。人々の問いかけにより、ヨナは本来の自分に立ち返ったのです。ヨナは答えます。

9:ヨナは彼らに言った。「わたしはヘブライ人だ。海と陸とを創造された天の神、主を畏れる者だ。」ヘブライ人とは、イスラエル人ということです。

「主を畏れる者だ。」とは、主を信じているということです。ヨナは自分の信仰を告白したのです。ヨナの信じている神は、海と陸とを創造された天の神です。ヨナは死に面しても神を信じているのです。詩編23編4節を思い出します。「死の陰の谷を行くときも わたしは災いを恐れない。」と。覚えておきたいみことばです。その信じている神から逃げたのです。ヨナは己の罪に気づき、悔い改めに向かうと信じます。神の憐みがヨナを包み込みそうされるのです。ここに集う私たちの一人ひとりの上にも神さまの憐みは望んでいるのです。そのことを

信じます。信じましょう！

10:人々は非常に恐れ、ヨナに言った。「なんという事をしたのだ。」人々はヨナが、主の前から逃げて来たことを知った。彼が白状したからである。

異教徒の人々が信仰者としての、それも預言者としてのヨナをしかるのです。なんで信じている神の元から命令に背いて逃げてくるのか、そのせいで大変なことが起こったのだ、と。

11:彼らはヨナに言った。「あなたをどうしたら、海が静まるのだろうか。」海は荒れる一方だった。12:ヨナは彼らに言った。「わたしの手足を捕らえて海にほうり込むがよい。そうすれば、海は穏やかになる。わたしのせいで、この大嵐があなたたちを見舞ったことは、わたしが知っている。」ヨナは自分を海の中に投げ込むように勧めます。「そうすれば、海は穏やかになる。」

ヨナは主の力を今でも信じているのです。いちずなヨナの信仰です。

13:乗組員は船を漕いで陸に戻そうとしたが、できなかった。海がますます荒れて、襲いかかってきたからである。乗組員たちは、ヨナを海に投げ込みたくなかったのです。助けようとしません。宗教的に偏狭であったヨナが軽蔑していた異邦人の人々の優しさに心動かされる場面です。

14:ついに、彼らは主に向かって叫んだ。「ああ、主よ、この男の命のゆえに、滅ぼさないでください。無実の者を殺したといって責めないでください。

主よ、すべてはあなたの御心のままなのですから。」

人々はヨナを海に投げ込む以外にないことを悟ります。

驚くべきことは、この時、異邦人たちは、主に祈っているということです。ヨナの信じる神、主にです。心を主に真の神さまに向けるという驚くべきことが起こっているのです。

15:彼らがヨナの手足を捕らえて海へほうり込むと、荒れ狂っていた海

は静まった。16:人々は大いに主を畏れ、いけにえをささげ、誓いを立てた。

主を知らなかった、認めなかった異邦人の人々が

主を信じる者たちへと変えられて行く変革の出来事となっているのです。

このように神の救いの働きはヨナを用いて、世界に広がって行ったのです。驚くべき物語、アメイジングな神さまのなされる救いの物語だと思います。わたしたちは、独り子イエスをさえこの世に与えてくださった愛なる神さまのみ名を讃えながら、神さまからの使命に生きる心を与えられたと願います。

◆ヨナの逃亡

- 1:主の言葉がアミタイの子ヨナに臨んだ。
- 2:「さあ、大いなる都ニネベに行ってこれに呼びかけよ。彼らの悪はわたしの前に届いている。」
- 3:しかしヨナは主から逃れようとして出発し、タルシシュに向かった。ヤッフアに下ると、折よくタルシシュ行きの船が見つかったので、船賃を払って乗り込み、人々に紛れ込んで主から逃れようと、タルシシュに向かった。
- 4:主は大風を海に向かって放たれたので、海は大荒れとなり、船は今にも砕けんばかりとなった。
- 5:船乗りたちは恐怖に陥り、それぞれ自分の神に助けを求めて叫びをあげ、積み荷を海に投げ捨て、船を少しでも軽くしようとした。しかし、ヨナは船底に降りて横になり、ぐっすりと寝込んでいた。
- 6:船長はヨナのところに来て言った。「寝ているとは何事か。さあ、起きてあなたの神を呼べ。神が気づいて助けてくれるかもしれない。」
- 7:さて、人々は互いに言った。「さあ、くじを引こう。誰のせいで、我々にこの災難がふりかかったのか、はっきりさせよう。」そこで、くじを引くとヨナに当たった。
- 8:人々は彼に詰め寄って、「さあ、話してくれ。この災難が我々にふりかかったのは、誰のせいか。あなたは何の仕事で行くのか。どこから来たのか。国はどこで、どの民族の出身なのか」と言った。
- 9:ヨナは彼らに言った。「わたしはヘブライ人だ。海と陸とを創造された天の神、主を畏れる者だ。」
- 10:人々は非常に恐れ、ヨナに言った。「なんという事をしたのだ。」人々はヨナが、主の前から逃げて来たことを知った。彼が白状したからである。
- 11:彼らはヨナに言った。「あなたをどうしたら、海が静まるのだろうか。」海は荒れる一方だった。
- 12:ヨナは彼らに言った。「わたしの手足を捕らえて海にほうり込むがよい。そうすれば、海は穏やかになる。わたしのせいで、この大嵐があなたたちを見舞ったことは、わたしが知っている。」
- 13:乗組員は船を漕いで陸に戻そうとしたが、できなかった。海がますます荒れて、襲いかかってきたからである。
- 14:ついに、彼らは主に向かって叫んだ。「ああ、主よ、この男の命の

ゆえに、滅ぼさないでください。無実の者を殺したといって責めないでください。主よ、すべてはあなたの御心のままなのですから。」

15:彼らがヨナの手足を捕らえて海へほうり込むと、荒れ狂っていた海は静まった。

16:人々は大いに主を畏れ、いけにえをささげ、誓いを立てた。